

第1回（仮称）伊賀市観光振興ビジョン策定検討委員会 議事要旨

■日 時：令和3年7月2日（金）9:00～12:00

■場 所：市役所本庁 501 会議室

■出席者：※敬称略、OL：オンライン対応

〔委員〕 木根 英男、浅野 正嗣、山口 真由子、長島 祥行、柳生 厚義、松田 美紀、
三橋 源一、榎 太基（OL）、池澤 良武、中川 智仁（OL）、神田 昌典、西川 祐介（OL）、
佐野 裕子（OL）、勝原 みどり／オブザーバー 日本航空 鈴木氏（OL）

〔事務局〕 伊賀市産業振興部 東 弘久、堀 久仁寿、〃 観光戦略課 川部 千佳、辻本 康文、
猪口 陽平、㈱イマイシス 多久和 敦志、㈱テイコク 南 雅

■議 事：

1. 挨拶
2. 委員の委嘱、自己紹介
3. 委員長及び副委員長の選任
委員長：神田 昌典氏、副委員長：勝原 みどり氏 を選任
4. （仮称）伊賀市観光振興ビジョンについて（諮問）
5. 協議事項
 - ①（仮称）伊賀市観光振興ビジョン策定方針（案）について …承認
 - ②本委員会の進め方について ……承認
 - ③伊賀市の観光に係るデータについて
— 休憩 —
 - ④観光振興ビジョンの策定にあたって（課題） ……意見なし
 - ⑤ディスカッション ……要旨は下記参照
6. その他 … 次回日程は、調整後に事務局から案内

■観光ビジョンの策定にあたって／多久和氏

- ・伊賀市に縁のある松尾芭蕉が言う「不易流行」が本ビジョンの基本的な考え方に相応しい。
- ・伊賀市の市場ポテンシャルについて、20～70 歳代の男女に実施した調査から全国の人口 3 万人以上の 1,000 自治体における相対的位置づけをみると、以下の通り。

総合魅力度：155 位（① 認知度：220 位、② 情報接触度：231 位、③ 観光意欲度：172 位、④ 居住意欲度：257 位、⑤ 産品購入意欲度：291 位、⑥ 食品想起率：415 位、⑦ 食品以外想起率：128 位）

以上より、伊賀市は「市場が求めるイメージづけが弱い」、地域イメージに対する食の想起は影響が大きい中、「食品以外の順位は比較的高いので、食品想起率を高めれば、総合的な優位性が高まる」など、「来訪先を選ぶ際、伊賀市を選択肢に入れる伸び代は

有りそう」、観光客へのアンケート調査からも、「食事場所が少ない」「土産を買える場所が少ない」「移動手段や案内が不十分」「夜に行ける施設がみつからない」等の意見もみられ、今後は、観光スポットを点から線へ拡充し、魅力的なモデルコースや一泊二日の滞在プランを描けることが重要となる。いわゆる「個別スポット堪能型」を目指し、伊賀市に「着いた時点でテンションが上がる」、「ワクワクの連続」、「気分のモチベーションをつなげる」ことが重要であり、観光客目線で理想の「滞在イメージ」、「思い出のコト・サイクル」をシェアできることが求められる。

〔初回ディスカッションのテーマ〕

- ・「未来志向」：ダレ得、誰の何の幸せを大事にするか。
- ・「必然性」：なぜ、伊賀市がそれを目指すのか？伊賀市で成立するストーリーを共有する。
- ・「何を」：具現化のために何をするか。社会・ユーザーのニーズから考える。

上記を踏まえ、10年後の伊賀の未来について考えてみる。

■ディスカッション（委員の発言要旨）

神田委員長：将来の伊賀について、「こうあったらよい」、観光からまちづくりまで、夢を伺いたい。

木根委員：サービス業を未来志向で捉えると、社会がどうあればよいかを考えること、共感トレンドとして、観光をテーマに自分たちがどうありたいかとともに、周りがどうあって欲しいと思っているか、その上で伊賀がどうなるか、子どもたちが育つ地域社会でどのような価値観で育っていくかといったことを考えた。ちょっとした思い遣りが観光まちづくりの原点かとも思える。外から来る人にどういう意識を持つかをまず大切に、次に街歩きについては観光客とともに地元の人々が生活を楽しめることも重要な視点であると思う。

浅野委員：3年前に関東から移住してくる前、観光客の一人として伊賀に来た際は市内の観光は1時間で終わり、土産も見つからず赤福を買った記憶がある。外国人観光客が忍者を楽しみにしつつ、土産に失望していたことも印象的で、インバウンド需要が戻るまで耐えるのではなく、京都のように、日本人が行きたくなるまちを目指すべきと考えている。移住してきて感じるのは市民が観光まちづくりを求めるのか、ターゲットは地元客も含むのかはシビアな問題である。複雑な取り組みの中で、自身の課題でもある土産物の盛り上げに取り組んでいきたい。

山口委員：私は、上野の街中で生まれ育ったが、かつては多様な店があることで生活が成立していた。今は郊外の大型ショッピングセンターを週末に訪れ、街中で買い物をするのもほとんどない。かつてのような街になったらよいと思っていて、そのために空き家等を活かさないかと考えている。

長島委員：私は、「こうあって欲しい」という将来像を描けていない。市民としては、郊

外で住んでいると伊賀が目指すべきは観光地よりも「ほどよい住み易さがあるまち」という思いが強い。市民がどう考えているかも今後の課題であり、業務としてこれまでは「市民を外へ」という意識が強く、「外から伊賀へ」の意識は低かった。最近は着地型観光を考える中で、インバウンドの動きをみると、伊賀市は忍者屋敷や伊賀上野城を主として、京都から宿泊地である名古屋への立ち寄り地である。実際歩いてみると移動距離が長く、その経路に楽しめるものがないので1日楽しめない。バス会社の視点で言うと、大型の駐車場が中心にあり、人を集めて土産屋を配置、少し歩けば楽しめる場所があればよい。普通の観光地として集客を高め、その上で特色が出せればよいのではないか。

松田委員：上野市街が観光地として考えやすく、日常でも域外から来訪した観光客から案内を求められることが多い。域外から来た方に対する案内を増やしたほうが良い。これに旧伊賀町の神社・仏閣等への立ち寄りが増えれば、旧上野市内以外にも観光地ができるのではないか。

柳生委員：私の居住地は名張市であるが、伊賀市は観光地としてポテンシャルは高いと思う。米や酒、牛等の全国でも胸を張れる資源もある。こうした中で、市民がこれ以上の観光発展を望むのか、観光関連事業者が本気で一致団結して観光振興に取り組めるかが課題である。キャパオーバーといった影響も懸念される場所である。伊賀市内ではビジネスホテルが台頭しており、リゾートホテルや観光旅館というコンテンツが弱く、観光客から観光のまちと捉えられづらいところもある。市民が観光地への変化を望んでいるかも含め方向性を定めていく必要がある。

三橋委員：私が郊外の阿山に住んでいる視点でみると、忍者は自存自衛ということで、観光はいらないというのが正直な話であるが、祭りや行事等の応援を頂けると助かるという意識。住んでよいまちは、過去から学べることも多く、近年のSDGsは持続可能な社会がある伊賀において、今後、田舎に住みたいと考える人向けに自然に囲まれた強いコミュニティを学ぶ場所としてPRできそうな気がする。10年後は忍者の活動をしている人たちも70歳代を超え、農作業の担い手でも世代交代が求められる。特に、現在の80歳代後半の農の技や良さを経験している人々がいなくなる前に、継承することが重要と考えている。こうした田舎暮らしの知恵は、災害時の生き残り方、備蓄や断食等の先人の生き方をこれからの暮らしに活かせる、こうしたことが伊賀ではできる。世界的な異常気象の中、災害産業においても日本はトップクラスとなっていくので、そのうちのサバイバル術とも位置付けられる忍術は、観光と暮らしを繋ぐ、重要なキーワードと感じている。

池澤委員：私はサラリーマンを辞めて10年が経過する。10年前の伊賀に対するイメージは、忍者を素材としてもっと観光振興ができると思っていた。中之立町通りは

忍者フェスタ等で非常に集客があった。(中之立町通りは)自分たちで仕掛け、15年掛けて盛り上がりを見せていた。多くの人が伊賀を訪れる中で、食事する場がないとの意見を聞いて、うどん屋を始めた。まだまだ、やり方次第で人を集められると思っている。まずは、食べ物の魅力を高めること、この他にも現在はできていないが授乳スペースの整備ニーズにも応えてきた。また、次世代の人材育成も、私の娘が忍者の殺陣教室を始めるなど頑張っている。店には英語圏のインバウンドも訪れていたが、携帯端末での英会話ソフト対応など、普段からできることに取り組んでいる。何より、面白いこと、面白い人と評価されることが大事である。伊賀市が観光まちづくりを進める際、ライバル市を見つける事、例えば、甲賀市や奈良市等の忍者のまちと比較して優位性を保つことが重要であり、場合によっては、こうした自治体と協働することも必要と考えている。私は、忍者や松尾芭蕉の勉強会も行っているが、市民が気軽にこうした勉強会に参加できるようになることが重要であると思う。

中川委員 : 私は、伊賀上野城の周りを忍者通りとし、歩行者天国にすればよいと思う。忍者に拘らず、時代の一貫性を保つ中で甲冑や着物等を活用すればよいのではないか。こうした取り組みに地元の白鳳高校生など、10代の若者による魅力あるコンテンツづくり、若者を中心とした観光客自身によるSNS発信にも期待したい。さらには、伊賀上野城に定点カメラを設置し人の動きを配信、出店を促してはどうか。旧上野市庁舎跡の図書館利用においては、立地環境の良さも活かし、観光客の立ち寄り拠点とすることも有効と考える。

西川委員 : 先ほど紹介された「不易流行」は、私の事業も併せて伊賀にマッチしており、伊賀の良さを伝えられそうである。日常業務の中で感じることは、観光業と非観光業の関係者間の分断が大きいことである。住民は人が外から来ることに否定的な感じもするし、来街者が移住・定住者につながっていく点からも住民の幸せを考える上でも、住民の観光客受け入れに関する啓発活動は重要と感じている。今後、観光まちづくりを進めるにあたり、尖ったビジョンが重要となるが、伊賀を一言で言い表せ、共有できるコンセプトが必要となろう。

佐野委員 : インバウンド対応について検討する場合、誰の、何のための幸せかを考えるには、住民を抜きには考えられない。忍者や歴史・文化を住民が誇りに思うことはあるので、観光目的として位置付けられるとよいのではないか。人口減少や後継者不足の中、10年後のあるべき姿において、移住者の増加は必要であり、修学旅行生等にも影響すると考えられるコンテンツを創り、磨くことが重要ではないか。子どもたちがリピートする意識を持つことで、家族との再訪につながるなどして、伊賀のファンが増えれば観光まちづくりの土台ができるのではないかと考えている。

鈴木 obs : 持続的な観光振興には、根本に地元の人を楽しめることが重要となる。いきな

りは難しいが、徐々に地元の人たちを巻き込めると他所からの人を呼び込めるのではないかと。伊賀に観光に来て滞り時間が短いことが指摘されることから、宿泊施設の問題や夜・朝の楽しみ方等の改善も課題となる。こうした取り組みによって地域の経済効果向上にもつながるのではないかと。

勝原副委員長：地域には、観光と居住の両方の側面が重要である。ここで育った人が自慢できること、空き家の多さは寂しいし、人通りが多いまちを望みたい。伊賀には城があることが観光まちづくりのポイントの一つである。良いところを発信し、先ほど紹介いただいた地域ランキングも個人的には思った以上の感じであり、今後の伸び代も期待できよう。住むのも来てもらうのもよい所として、伊賀市のポテンシャルは高い。良い所の移動を工夫し、子ども連れにも満足してもらえよう、ワクワクが続けられることが重要と考える。

神田委員長：私は上野の丸の内に住んでいた時から伊賀に親しんでいる。子どものころは当時のジャスコやニチイへ行くことが楽しみであり、ほかにも天神さんを歩くだけでワクワクした思い出がある。社会に出てからは、海外赴任も経験し、7年前に帰国したが、まちによって歴史・文化の発想が異なることを実感した。自然環境を嫌い、歩くことを厭う人もいる。観光を気嫌いする人は世界中のどこにでもいる。ハワイもコロナ禍において観光ニーズが好転する中、住民の中には観光客がいららないと言う人もいる。観光地として成り立っていいかは、住民の意識も含めて判断する必要がある。住民が住み易く、観光客をウエルカムとするには、住民の意識改革が必要となる。観光を生業とする人達がいる中で、伊賀で生活が成立した時代からITの進展で消費環境も変わっている。コロナ禍で観光業が低迷する中、どうすればよいかを真剣に見直す時期を迎えていると認識している。伊賀の小学生は、教育旅行で京都・奈良、三重県内ではスペイン村に出向いていたが、私は、事業の中で教科書では学べないことを地域の人から学ぶことを提案している。人と接する部分がリピーターを生み出す重要な要因となっている。伊賀の観光は、街中が中心であったが、これからは、地域の人たちが伊賀を知り、学ぶことが観光につながるのではないかと考えている。今後の観光まちづくりは、生活の中で地域の人と交流すること、そこから移住・定住にもつながる視点に基づき、地域産業の担い手がワンチームとして安定することが最も重要と考えている。5年、10年後を見直すために課題解決を進め、観光について地域の人たちに知っていただくことが大切と思っている。今回は、一回目であるが、今後は皆さんの意見を伺いつつ、ビジョン案を取りまとめていきたい。

事務局：観光まちづくりは、多様な見方が求められる。地域の持続可能性を高める一つの視点として活用していく中で「旅住包摂」は一つのキーワードと考えている。今回は、月1回の開催を目途に定例会議を予定することが難しいようであれ

ば、事務局でその都度、会議日程を調整し案内していきたい。

神田委員長：今回は、初めて会った方々もおられたが、今後は、伊賀の観光振興について楽しく意見交換し、今後につなげていきたい。本日は、ありがとうございました。

以上